愛なき王命結婚のはずが、執着夫の愛撫に堕とされそうです

プロローグ

「この結婚は、王命だ。……愛はない」

夫となるイルデブランドが、ベッドの下に跪いて言った。

今さらながらはっきり宣言されて、ルクレツィアは何も言えず、ただ青い瞳を彼に向ける。

結婚に夢を見ていたわけではないが、面と向かって言葉にされれば、それは錐（きり）のように胸を抉った。これが互いの意志によらない、愛のない王命結婚であることを改めて突きつけられ、ルクレツィアは唇を噛んだ。

――そんなことは、とっくにわかっている。

その沈黙をどう受け取ったのか、イルデブランドが紫水晶の瞳でルクレツィアを見上げる。少しうねりのある黒髪が額にかかり、端正な顔立ちをいつもより若々しく見せている。黒髪の隙間から覗く耳元で、赤い魔石の耳飾りが揺れる。

彼は、王国の魔術師を統括するアルジェント公爵の子息だ。魔術師としての力量は父親を凌ぐとも言われ、王太子の絶大な信頼を得ている。

結婚相手としては悪くはない。――アルジェント家の人間でさえなければ。

そう思うそばから、先ほど王城で目にした光景が脳裏に蘇って、胸の奥が塞がれたように言葉が出てこない。

無言を貫くルクレツィアを持て余したのか、イルデブランドは凛々しい眉を顰めた。

「ルクレツィア？　これからはそう、呼んでも？」

「……ええ。そう、お呼びくださいませ。……旦那様」

「イル、だ。愛称で呼んでくれ」

なんとか言葉を捻り出したものの、どうしても遠慮がある。

彼は王立学院の二年先輩で、ルクレツィアの兄ロレンツォの同級生だ。学院では生徒会の副会長を務め、学院中の女子学生の人気を会長の王太子と二分していた。右脚に障碍のあるルクレツィアを気遣ってくれていたが、愛称で呼べるほど親しくはない。

再び黙り込んでしまったルクレツィアに焦れたのか、イルデブランドの右手が伸び、寝台に腰掛けた彼女の白い絹の夜着をそっと捲り上げていく。その人差し指には大きな紫水晶がはまった指輪が光る。もちろん、グラヴィーナ家の鉱山から産出した最高級の魔石だ。

二人は王の面前で婚姻証書に署名し、夫婦になった。王命であるゆえに、ルクレツィアが初夜を拒むことは許されない。

息を詰めて見守るルクレツィアの目の前で、細く白い脚が露わになる。

その右脚の膝上には魔石の嵌ったミスリルの輪が装着されていた。イルデブランドがその輪に右手で触れる。一見、色とりどりの宝石を鏤めた豪華な装飾品のようだが、これは自由に動かないルクレツィアの右脚を扶助する魔道具だった。

普段、隠して人目にさらすことのないそれを真剣に見つめられて、ルクレツィアは恥ずかしさについ、顔を背ける。長いまっすぐな銀髪がはらりと揺れた。

「これがないと、脚は動かないのか？」

「ええ……」

十年前の事故で怪我を負った右脚は、杖と魔道具なしでは体重を支えることも難しい。

イルデブランドはルクレツィアの不自由な右脚を、大きな手でゆっくりと撫で上げた。

「あの事故が、君の右脚を奪ってしまった。俺は夫として、君の杖になりたい」

「ただの事故です。あなたが償う必要はないわ」

ルクレツィアの言葉を明確な拒絶と受け取ったのか、イルデブランドが鋭い視線を向ける。

「君は、この結婚に不満のようだが」

「結婚に不満ではなくて……」

ルクレツィアが言い淀む。

「つまり、相手が不満か？　――よりによって、アルジェント家の庶子とだなんて」

ずばりと言われて、ルクレツィアは長い銀色の睫毛を伏せた。

アルジェント家とグラヴィーナ家の確執は百年をはるかに超えて続いている。長く対立する二大家の宥和を図るのもこの結婚の目的のひとつだが、結婚ごときで成し遂げられるとは、到底、思えなかった。

ルクレツィアは視線を逸らしたまま言った。
「あなたの方こそ、わたしのような傷物ではご不満でしょう。……もっとも、この結婚のおかげで我がグラヴィーナ家の内情に干渉する権利を得たから、利益がないわけではないのかしら」
その皮肉を、イルデブランドはあっさりと受け流した。
「たしかに、王命がなければ君との結婚など許されなかった。俺は王命に感謝している。君には受け入れがたいだろうが……だが」
イルデブランドが低い声で告げる。同時に、右脚をゆっくり撫でていた手が内股に触れ、さらに奥へと侵入する。その気配にルクレツィアが身を固くした。
「初夜には見届け人もいる。ごまかしはなしだ」
内股を撫でる掌の熱から逃れようと無意識に後ずさるが、その腰をイルデブランドのもうひとつの手ががっちりと捕まえて離さない。ルクレツィアが身を捩り、銀髪が揺れる。
怯えて息を詰めるルクレツィアの顔のすぐそばまで、端麗な顔が近づいてくる。
唇を塞がれ、熱い舌が割り入ってきた。初めての経験に脳が痺れたようになり、抵抗できないまま咥内を貪られる。長いキスに舌を絡め取られ、さんざんに嬲られて頭が真っ白になる。そうして抵抗の気力をへし折られたころに、ようやく唇を解放された。
気づけばベッドに押し付けられ、真上から覆い被さられて、身動きも封じられていた。
「加護姫は、唇も甘いな……」
見下ろしてくる紫水晶の瞳はギラギラと妖しい煌めきを湛えて、情欲に濡れた唇が弧を描く。

昼間の端正さは鳴りを潜め、欲望を剥き出しにした凶暴な獣のようだった。
彼は、もう一度残酷に告げた。
「たとえ、この結婚に愛がなくても――君は俺のものだ」
――そう、この結婚に愛がなくても。わたしはもう、逃げられない。
蹂躙の予感に、ルクレツィアは肉食獣に魅入られた獲物のように身を震わせた。

第一章　王命結婚

王国を支配する五つの光。
王家エゼキエーレ家と四大公家――アルジェント家、コルト家、バトローニ家、そしてグラヴィーナ家は、数百年にわたって王国を支えてきた。
四家はそれぞれ広大な領地を擁して国政の枢要に関わり、多くの特権を享受する。
その中でも、グラヴィーナ家は女神の加護を受け、その領地シリンジュの鉱山から魔石を産出する。そしてどんな魔術も、その行使には魔石の媒介を必要とした。
魔石はまさしく女神の加護の賜物であり、王国にとってグラヴィーナ家は魔石を生み出す唯一の、そしてなくてはならない家であった。
つまり、魔術師を統括するアルジェント家と魔石を産出するグラヴィーナ家は、王国統治におけ

る両輪ともいうべき二つの家門と言える。
だが、いつのころからか、両家は深く対立するようになった。きっかけは些細なことであったが、数百年にわたって憎しみは増幅を続け、いまや不倶戴天の敵同士である。
片や、王家の姻戚として国政に食い込むアルジェント家。
片や、政権とは距離を置き、女神への信仰を貫くグラヴィーナ家。
両家の婚姻は絶え、王都の民衆もアルジェント派とグラヴィーナ派に分かれていがみ合うに至り、両家の対立は王家にとって頭の痛い問題となっていた。
一年前、グラヴィーナ公爵ルシアーノが急死した。即座に嫡男のロレンツォが爵位を継承したが、不穏な空気がグラヴィーナ家を覆い始める。
魔石の産出量と流通量が合わなくなったのだ。
最初は単純な書類のミスかとも思われたが、魔石が横流しされている可能性に気づいたロレンツォは、独自に調査を始めた。その矢先のことである。
領地の視察に出たロレンツォが、予定の期日を過ぎても戻らなかった。
馬車や従者も、すべてが煙のように消えた。
若き公爵の失踪に、グラヴィーナ家は私兵を派遣して捜索したが、行方は杳として知れない。
そして失踪からひと月になるころ、アルジェント家の領地ロクシアで若い男の死体が発見された。
その遺体は、ロレンツォと確認された。だが――
彼は、一人ではなかった。

ロレンツォの遺体の傍らには、心臓を一突きにされた、アルジェント家の令嬢オクタヴィアの遺体があったのだ。
対立する両家の男女が、同時に死体となって発見された。
――駆け落ちか。あるいは無理心中か。
ロレンツォの失踪も死も、グラヴィーナ家にとっては青天の霹靂だった。
なぜ、ロクシアで。なぜ、オクタヴィアと。いったい、二人に何が――
アルジェント家が出した結論は、ロレンツォがオクタヴィアに懸想して誘拐し、殺害後に自ら命を絶ったというもの。グラヴィーナ家としては到底、受け入れられない。
なぜなら、女神の教えは自殺を禁じている。
自殺者は教会から破門され、葬式はもちろん、まともな墓も作れない。
公爵家当主であるロレンツォの破門――そんな醜聞は絶対に回避しなければならなかった。
女神への信仰篤いグラヴィーナ家は聖職者を何人も輩出し、先代当主の弟グレゴリオは枢機卿の重職にある。グレゴリオは教団内の権力を駆使し、「甥のロレンツォは野盗によって殺害された」と結論付け、ロレンツォの破門を回避した。
アルジェント公爵はその決定に不満を露わにし、娘を殺したロレンツォの葬儀など許せないと、私兵団に命じてロレンツォの葬儀が行われる王都の聖堂を襲撃させた。
国王は直ちに王都騎士団を急行させ、大聖堂に面する中央広場でアルジェント家の私兵団を制止し、二家の衝突は回避された。最悪の事態は免れたものの、市中騒乱一歩手前であった。

当然ながら国王は激怒した。そして襲撃の責任を取る形で、アルジェント公爵に蟄居（ちっきょ）を命じるとともに、王家と四大公家に対し緊急招集をかけた。

王城内の五芒星の間（ペンタグラン マ）――王家と四大公家の直系だけが入れる、王国最高格式の広間に、王国の枢要に与（あずか）る五つの家門の者たちが急ぎ集められたのだ。

床一面にモザイクタイルで描かれた五芒星は、王国を支える五つの家を象徴する。

金色に輝くひとつの頂点は一段高くなった玉座を指し、王家エゼキエーレ家の威光を示している。

その他の四つの頂点が向かう先は、四大公家がそれぞれ占めている。

玉座に近い場所にアルジェント家とグラヴィーナ家。やや下がってコルト家とバトローニ家。

午前中の騒ぎを受けて駆け付けた四大公家の者たちは、緊迫した雰囲気の中、王家の入場を待つ。

当主イグナシオが蟄居を命じられたアルジェント家は、当主夫人アデラと嫡男のアモディオ、そして庶長子のイルデブランドと、当主の弟二人。みな令嬢オクタヴィアの喪に服して黒衣を着用している。

一方、当主ロレンツォの葬儀を終えたばかりのグラヴィーナ家もまた、当主の妹ルクレツィアは漆黒の喪服姿である。

女神の加護を象徴する銀色の髪は未婚の娘らしく背中を覆い、黒いレースの手袋を嵌めた右手には、とりどりの魔石を嵌めた杖が握られている。

その背後には、黒い枢機卿の聖衣（カソック）を着た前当主の弟グレゴリオただ一人。

当主ロレンツォを失い、グラヴィーナ家の直系は、ただ二人きりになってしまったのだ。

「国王アルフォンソ陛下、および王妃ベルタ陛下、王太子シルヴェストル殿下のご入場です」

宮内長官の声と共に、国王一家が入場する。

「聖エゼキエルの光に敬礼！」

呼びかけに合わせ、四大公家の面々が一斉に頭を下げた。

「楽にせよ」

国王が鷹揚に言うが、その表情は硬い。玉座から一瞬、ルクレツィアに視線を送ると、重々しく語り始めた。

「今日、集まってもらったのは、他でもない。現在、我が王国は二つの危機に直面しておる。――ひとつは先ほどの、王都の中央広場における武力衝突未遂である。その責任を取って、アルジェント公爵イグナシオには蟄居を命じた。さらなる処分については、追って沙汰を待つように」

アルジェント家が一斉に、黒い喪服の膝を折って頭を下げ、恭順の意を示す。

国王が頷き、広間を見回した。

「――もうひとつの危機は、グラヴィーナ公爵ロレンツォの死だ。彼はまだ年若く、正式な継承者を得ておらぬ」

広間の視線が集中するのをルクレツィアは背中に感じ、唇を噛んだ。

ロレンツォはまだ二十二歳で妻帯せず、当然ながら子供もいない。叔父のグレゴリオは枢機卿の地位にあり、独身を貫いている。

「グラヴィーナ家は女神の加護を受けた家。グラヴィーナ家が絶えれば魔石は得られぬ」

国王は灰色がかった青い瞳でじっと、ルクレツィアを見下ろしている。
その射貫くような視線にたじろぎ、ルクレツィアはさらに俯いた。
王国の継承権は正妻腹の嫡子が優先されるが、庶子も継承権を持つ。だが、グラヴィーナ家は家訓として側室を娶らない。一夫一妻を重んずる女神の教えを奉じてのことだ。
その結果として、今、家門は存亡の淵に立たされている。
ルクレツィアが目を伏せるのを見つめつつ、国王は続けた。
「王国の法は、男系継承で女子の継承を許してはおらぬ。だが、グラヴィーナ家においては例外的にそれを許した前例もある。今回も、特例としてルクレツィア公女を女公爵に叙爵し、継承を許す」
国王の言葉に、ルクレツィアがホッと息を吐いた。
グラヴィーナ家断絶の危機はひとまず回避されたのだ。
「ただし――」
だが、国王は条件を突きつけた。
「国王たる余が指名する者を婿に迎えることを条件とする。また婚姻は今、この場にて行え」
ルクレツィアは思わず顔を上げ、国王を見た。
――婚姻は今、この場で？
とっさに意味がわからず、ルクレツィアはゴクリと唾を飲み込んだ。
ざわりと周囲に動揺が広がる。国王がグラヴィーナ家の女当主の伴侶に指名する以上、四大公家に連なる者であるのは間違いない。いったい、誰が――
「ルクレツィア公女、前に出よ」
命ぜられて、ルクレツィアは右手に持った杖を慎重に動かし、動かない右脚を引きずって数歩前に出る。一歩進むごとに、背中を覆う銀髪が流れ、魔力で照らすシャンデリアの光を弾いた。
カツン、コツン……
大理石の床に響く音が、自身の不自由な脚を広間に知らせる。ルクレツィアはその音の響きを聞きながら静かに思った。
――十年ぶりだわ。
十年前、王城内の事故で、ルクレツィアは右脚を損なった。それ以来、王城からは遠ざかっていた。
今、こうして継承のために五芒星の間に立っていることが、なんとも皮肉に感じられる。
五芒星を描いたモザイクタイルの中央部分まで進み出て、ルクレツィアは改めて国王を見上げる。
女神の加護を示す深い青の瞳と、銀色の髪。儚げな風情ながら、その唇は強い決意を表すように引き結ばれている。杖を握って体重を支える右手は微かに震えていた。
本来なら片足を後ろに引いて腰を落とすべきだが、ルクレツィアはそれができない。
横から、王太子であるシルヴェストルが口添えした。
「父上、公女は足が悪い。礼法は免除を」
「うむ」

「……ルクレツィア公女、無理はせずともよい」
シルヴェストルが国王の許しを得てくれたので、ルクレツィアも礼を述べる。
「ご厚情、感謝いたします」
ルクレツィアが頭を下げ、畏まったのを見て、国王が広間全体に通る声で告げた。
「改めて、グラヴィーナ公爵息女ルクレツィアよ、グラヴィーナ公爵家を継承するにあたり、余の指名する者との婚姻を命ずる」
そして広間の一角に視線を向け、呼びかけた。
「アルジェント公子イルデブランド！　前に出よ！」
その声は雷鳴のごとく五芒星（ペンタグランマ）の間に響く。
誰もが耳を疑う国王の決断だった。
一瞬静まり返った広間が、次の瞬間、どよどよと揺れる。
「……アルジェント家の、イルデブランド公子だと？」
「あの、庶子を？」
「だがそもそもグラヴィーナ家の婿をアルジェント家から？」
ざわめく五芒星（ペンタグランマ）の間で、ルクレツィアは血の気が引いていく。
手足の先が冷たくなって感覚がなくなっていくのに、胃の腑のあたりが焼けるように熱い。
――わたしの夫に、アルジェント家の男を？　よりによって？　そんな、馬鹿な。
国王が一同に呼びかける。

「諸卿も知る通り、本日の乱闘騒ぎでは負傷者も出た。アルジェント家とグラヴィーナ家の長きにわたる確執は余の憂いである。余は、この婚姻により両家の遺恨が晴れることを願っておる」
杖にすがり、凍り付いたように立ち尽くすルクレツィアの耳に、カツカツと響く靴音が聞こえた。
左斜め後方から近づく足音がルクレツィアの左隣りで止む。彼女の視界の隅を黒いものが動いた。
ルクレツィアよりも頭ひとつは背が高く、喪を表す黒一色の出で立ちに黒い髪。黒いビロードのマントがふわりと靡（なび）いて、男が長身を折りたたむように片膝をつく。
「アルジェント家のイルデブランド、陛下の御前に」
――イルデブランド先輩……
王立学院で二学年上だった彼の姿を目にするのは、四年ぶりだった。
ドクンと心臓が脈打ち、ルクレツィアは息を呑んだ。
――この人は、この結婚を受け入れるの？　でも、いくらなんでも……
ルクレツィアにとって、彼は敵対する家門の息子だが、それは相手にとっても同じことだ。まして、ロレンツォと情死を遂げたといわれるオクタヴィアは、彼の妹なのだ。妹を殺した（と、彼らは思っている）男の妹と結婚なんて、受け入れがたいに違いない。
衝撃のあまり息もできずに状況を見守っていたルクレツィアの前で、しかしイルデブランドは胸の前に手を置き、深く頭を下げた。
「王命、謹んでお受けいたします」
あっさりと結婚を承諾した男を、ルクレツィアは信じられなかった。

——本気で？　王命、だから……？
「ルクレツィア公女、そちは如何(いか)に」
国王に問いかけられ、ルクレツィアは動揺のあまり杖を取り落としてしまう。
「あ……」
大きな音を立てて杖が倒れ、支えを失ったルクレツィアはバランスを崩す。
目の前を自身の銀髪が流れ、床のモザイクタイルが迫る。
床に叩きつけられるのを覚悟し、目を瞑(つむ)る。だが、次の瞬間、がっしりとした腕に支えられていた。
「あ……」
見上げれば、整ったイルデブランドの顔があった。黒い髪に紫水晶の瞳が、まっすぐにルクレツィアを見下ろしている。
イルデブランドはルクレツィアを抱き留めたまま身を屈め、床に転がる杖を拾い上げた。そして杖をルクレツィアに手渡すと、右腕で彼女を支えて立ち上がらせる。男性に抱え込まれている体勢は極めて屈辱的だったが、王の御前で暴れるわけにもいかない。震える声でルクレツィアは詫びた。
「陛下、ご無礼をお許しください……」
「よい、許す。それより、王命に従うか否か」
国王はそう言って、ルクレツィアをじっと見下ろしている。慌てて姿勢を正そうとしたが、イルデブランドはルクレツィアを支える右手を離そうとしない。

その手を振り払うことを諦めて、ルクレツィアは大きく息を吸い込んでから、震える声で告げた。
「王命……謹んでお受けいたします……」
その宣言を聞いて、国王は右手を掲げて宣言した。
「ならば、書記をここに。この五芒星(ペンタグラマ)の間にて婚姻証書に署名せよ」
かねて準備してあったのだろう。すぐに侍従たちにより、金の装飾の入った小卓(しょうたく)と、サインするばかりになった証書、そして羽根ペンとインク壺が運ばれてきた。
目の前に置かれた婚姻証書に戸惑ううちに、イルデブランドは右手でルクレツィアの左肘を支えたまま左手でペンを取ると、インク壺に浸けて走らせる。左利きであった。
イルデブランド・イリア・アルジェント・デ・ロクシア。
——ロクシアの領主アルジェント家の庶子イルデブランド。
サインを終えると、イルデブランドは羽根ペンを置く。そして、ルクレツィアの右手から杖を半ば奪い取り、小声で囁いた。
「支えているから。……サインを」
たしかに、支えてもらわねば立ったままで署名をするのは難しかった。
ルクレツィアは諦めて羽根ペンを手にし、ペン先をインク壺に浸す。
どうしても右手が震えてしまう。左手を小卓について体重を支えながら、慎重に字を綴っていく。
ルクレツィア・ロア・グラヴィーナ・デ・シリンジュ。
——シリンジュの領主グラヴィーナ家の嫡子ルクレツィア。

サインを終えた証書を侍従が国王の元に運び、王の目の前で紋章官が印璽を押した。
「婚姻証書に署名が為された。王命により、二人が夫婦となったことをここに宣する。わが王国に栄あれ」
国王が重々しく宣言すると、広間中から拍手と、「国王万歳」の声が湧き起こった。
署名が済んで国王が退出した後、ルクレツィアは呆然としていた。
――こんな形で結婚させられるなんて。
ルクレツィアは無意識に唇を噛んだ。
兄の死を悼む余裕もなく、宿敵の家から婿を迎え入れる。
王命とはいえ、気持ちが追いつかない。
「ルクレツィア嬢」
声をかけられて我に返れば、四大公爵の一人、コルト公爵だった。
「急なことで、大変だったね」
小柄で人の好さそうな中年男性だったが、さすがは四大公家の当主然とした貫禄がある。
「いえ……その……閣下のご意向に沿えず、申し訳ありません」
ルクレツィアが目を伏せた。彼の背後に、公爵家の分家筋にあたる青年の姿を見たからだ。
以前よりルクレツィアとの婚姻を勧められていた青年である。ルクレツィアはシリンジュにある女神の神殿に入り、生涯を女神への奉仕に捧げるつもりで、一度は断った。
だが、兄の失踪後、縁談が再び浮上していたのだ。

「残念だよ、君とエンリケならば、似合いだと思ったのだがね」
気づかわしそうにこちらを見る青年に、ルクレツィアはいたたまれない気分になる。
「これもすべて、女神と王家のご意向ですので……」
「それはそうだ。だが、陛下もあまりに強引だ。よりによって、アルジェント家の男を宛がうとは」
なんとも答えようがなくて、ルクレツィアは思わず左手を胸に当てる。
むかむかと、胃の腑のあたりに焼け付くような痛みが走る。
――つらい。不安で、足元から崩れ落ちそう。
「ロレンツォ卿もよりによって、アルジェント家の令嬢と心中しなくてもよかったのに」
コルト公爵の言葉に、ルクレツィアはぐっと唇を噛み締める。そして顔を上げ、毅然として言った。
「……コルト公爵閣下、兄は強盗の害に遭ったと、教会よりも認められております。憶測で語るのはお控えくださいませ」
物静かで従順な令嬢だと思っていたのか、コルト公爵はルクレツィアの反論に露骨に動揺を見せた。
「そ、そうかね？　だが聞いた話では状況から見て――」
「閣下。あちら様のご令嬢の名誉にも関わります。あまり根拠のないことを吹聴なされば、後々遺恨を生みましょう」

憶測で心中説を流した場合、より名誉を傷つけられるのは、むしろ女性のオクタヴィアである。アルジェント家の怒りを買う覚悟はあるのか、と遠まわしに言えば、コルト公爵は口を噤んだ。

そのやり取りを潮どきと見たルクレツィアは、コルト公爵と背後の青年に一礼すると、杖を起点にゆっくりと踵を返す。

ロレンツォとオクタヴィアの間に何があったのか。

それはグラヴィーナ家だけでなく、アルジェント家にとっても極めてセンシティブな問題だ。誰が聞いているかわからない王城内では避けるべき話題だった。

コルト家の二人から遠ざかりつつ、ルクレツィアは心の中でため息をついた。

なんとも皮肉な話だと思ったからだ。

アルジェント家の領地であるロクシア地方の森の中の小屋で、ロレンツォとオクタヴィアの遺体は発見されたというが、ルクレツィアには、二人が心中するはずがないと思うに足る理由があった。

ロレンツォには秘密の恋人がいたが、それはオクタヴィアではない。

――でも、状況的に噂はめぐるだろう。

敵対する家門同士の、禁断の恋の果ての情死。そんな風に取り沙汰されるに違いない。

ロレンツォの恋人の心境を考えるだけで、ルクレツィアは胸が痛む。

恋人が死んだだけでも辛いのに、さらに他の女と一緒にだなんて――

ルクレツィアの、杖を握る右手につい、力がかかる。

――いえ、人のことを心配している場合ではないわ。あの事件の余波で、わたしまで敵対家門の男と結婚させられてしまったのだから。

ルクレツィアは顔を上げると、叔父グレゴリオを探した。

叔父は兄の失踪以来、未熟なルクレツィアを支えてくれていた。彼はいかにも身分のありそうな白髪の紳士と話をしていた。

カツンと杖の鳴る音で気づいたのか、グレゴリオが振り返る。

「おお、ルクレツィア……こちらが国王秘書官のダミアーニ卿だ。今夜の、見届け人となる」

「見届け人？」

ルクレツィアが首を傾げた。ダミアーニ卿と呼ばれた紳士は白髪を綺麗に撫で付け、口髭も整えられ、刺繍の入った豪華なコートに、左肩を覆うマントを着けている。

「これは、ルクレツィア公女。この度はご結婚おめでとうございます。国王陛下より婚儀の見届け人を仰せつかりました、リカルド・ダミアーニと申します」

丁寧な挨拶を受けて、ルクレツィアも礼を返す。

「ルクレツィアと申します。……それで、見届け人、とは？」

ダミアーニ卿は顔をあげると、困ったように眉尻を下げた。

「陛下としては、此度の婚姻により、一日も早いグラヴィーナ家の継嗣誕生を切に願っておられる。正真なる結婚が成立したことを以て襲爵の条件になさりたいと。それで、某を見届け人としてお差し向けになりました」

意味を図りかね、パチパチと瞬きをするルクレツィアに、グレゴリオが小声で説明した。

「書類上、法的には婚姻はすでに成立しているが、陛下はそれでは心許ないと。白い結婚ではなく、両家の正真なる結婚によって襲爵を許すとの仰せだ」
「正真なる、結婚……」
青い目を瞠ったルクレツィアに、ダミアーニ卿が気の毒そうに微笑んだ。
婉曲的な言い回しだが、それは要するに――
「つまり……その、今夜……」
ルクレツィアがとっさに左手で胸元を押さえ、ドレスの奥に隠したロザリオを握り込む。
その様子に、ダミアーニ卿とグレゴリオは目線を交わしてから、頷いた。
「ええ、そうです。初夜の、見届け人ということです」
グレゴリオがルクレツィアに向けて言った。
「というわけで、私は先に屋敷に戻って婚礼の準備を申し付けねばならぬ。幸い……と申すべきか、ロレンツォの葬儀のために一門の者たちが王都に出てきておる。陛下のご意向と婚姻について彼らに伝えておく」
「グレゴリオ叔父様……」
ルクレツィアは叔父の、グラヴィーナ家の直系に共通する青い瞳を見つめる。
「そんなに……急がねばならぬのですか？　我が家もアルジェント家も喪中です」
ルクレツィアの縋るような発言に、ダミアーニ卿が眉根を寄せた。
「陛下におかれましては、両家に対し、すぐにも喪服を脱ぐようにと、お命じになりました」

通常であれば、家族を失ってから半年から一年ほどは喪に服し、婚礼などの祝い事は慎むものだが、王はその猶予を許さなかった。
グレゴリオが不安げな姪を宥めるように言った。
「それが陛下のご意向とあれば、臣下としては従わざるを得ぬ。……こまごまとした差配は私に任せ、お前は心を落ち着けてゆっくり帰ってきなさい」
「……はい、叔父様」
ルクレツィアは去っていくグレゴリオの聖衣の後ろ姿を見送り、ドレスの下のロザリオを握り締める。突然に結婚を命じられただけでも動揺して、立っているだけでやっとだった。
――あまりに横暴だわ。いったい、誰がこんな結婚を思いついたのか。
数百年にわたるグラヴィーナ家とアルジェント家の確執に終止符を打ち、断絶の危機に瀕したグラヴィーナ家に継承者をもたらす。
その二つを成し遂げるための、両家の婚姻ではある。
アルジェント家のイルデブランドは公爵の長子でありながら、正妻の子でないために爵位は継げない。だが王太子シルヴェストルの親友であり、王立学院でも首席を譲ったことがない秀才と名高い。魔術師を統括するアルジェント家でも群を抜いた魔術の才を持っている、ともっぱらの評判だ。
家を継がなければならないルクレツィアにとっても、最高の婿候補と言える。
但し、アルジェント家の人間でさえなければ。
長きにわたる両家の確執は、ロレンツォとオクタヴィアの不審死によって緊張の度合いを高め、

一触即発の状態だ。その喪中に、こんな強引な結婚、上手くいくのだろうか。
ルクレツィアが王命結婚の理不尽さを受け止め切れずにいた、その時。
「ルクレツィア公女！」
背後から呼び止められ、ルクレツィアはカツンと音を立てて杖をつき、振り返った。
呼び止めたのは、黒一色の喪服に黒い髪の男。イルデブランドだった。
すらりとした長身にやや細身の、均整の取れた体つき。うねりのある黒髪は無造作に顔を取り巻いているが、青みがかった光を湛え、艶やかであった。誰もが見惚れてしまうほどの整った顔立ちのなかで、凛々しい眉が不安そうに顰められていた。紫水晶のような切れ長の瞳に、やや薄いが形のよい唇はわずかに開いて何か言おうとしている。両耳には赤い魔石の耳飾りが揺れていた。
喪服は黒一色だが、左肩を覆うマントの留め具にも魔石がはめ込まれ、右手の指には大ぶりの指輪が光る。魔術師の彼は、魔術の発動のための魔石を身にまとう必要があるのだ。
「……イルデブランド様……」
「屋敷に戻るなら車寄せまで送る」
「いえ、その必要はありません。我が家の護衛騎士がおりますので……」
反射的に断ってしまってから、ルクレツィアはしまったと思う。
さきほど王の御前で婚姻証書にサインをして、この人とは法的にはもう、夫婦なのだ。
断っている場合ではない。
「その……」

イルデブランドがコホンと咳払いしてから言った。
「少し、話しておきたいこともある」
ルクレツィアは周囲をそっと見回した。そこにいる誰もが、見ないふりをしつつも自分たち二人に注目している。今ここで、この男を振り払うのは悪手には違いない。
ルクレツィアは渋々、頷いた。
「では、車寄せまでお願いします」
差し出された右腕に、ルクレツィアはそっと左手を乗せる。
隣に立つと、ちょうど頭ひとつほどの身長差があった。右手の杖とイルデブランドの腕と、左右それぞれに頼りながら、ルクレツィアはゆっくりと広間の入口へ向かって歩き出す。
数歩進んだところで、頭の上から低く深みのある声が降りてきた。
「……学院では、いつもロレンツォに追い払われていたな」
「兄には、アルジェント家の方には近づくなと、常に言われておりましたから」
ルクレツィアはつんと返した。
ついでに、兄ロレンツォとオクタヴィアの件は何かの間違いだと言外に滲ませる。
一瞬ためらった後に、イルデブランドが言う。
「……俺も信じられない気分だが、状況的にはそれ以外に考えられない。若い女性には言いにくいのだが……」
「兄には、我が家中に恋人がおりました」

頭上で、イルデブランドが息を呑んだ気配がした。
「それは、間違いないのか？」
「ええ。身分差があるのでそのままでは結婚できません。でも、兄は養女にしてくれそうな貴族家を探していたはずです」
イルデブランドの沈黙が、彼の内心の動揺を表していた。
禁じられた恋の末の心中ならば、彼は妹の死を受け入れるつもりだったのだろうか。
「……つまり、ロレンツォには心中する理由がない……」
「兄の性格から言って、当主の責任を放りだして心中などしないと思います。……我が家の、血筋のこともわかっておりますでしょうし」
ロレンツォはグラヴィーナ家の当主である。なんとしても加護の血を伝えなければならないと、幼少時から叩きこまれてきた。
「二人の間に何があったのか、わかりません。しかし、どんな理由であれ、兄が自ら命を絶つことはあり得ないと思います。状況的に心中にしか見えなくても、決めつけないでいただきたいのです」
頭上で、イルデブランドがため息をついた。
「現在、騎士団で調査中だ。有力な情報として聞いておく。……それより今夜なのだが――」
五芒星（ペンタグランマ）の間と廊下を仕切る大きな扉の前に立つと、小姓の手によってそれが開かれる。
二人は連れ立って王城の廊下に出た。毛足の長い真っ赤な絨毯が敷き詰められ、壁際には等間隔に衛兵が立っている。
廊下の一角には各家の護衛騎士たちの待機スペースがある。五芒星（ペンタグランマ）の間は四大公家の直系しか入ることができないので、護衛騎士たちはそこで主人を待つのだ。
ルクレツィアの護衛騎士も主人を見つけて、慌てて駆け寄ってきた。
「お嬢様！」
グラヴィーナ家の銀色の山羊の紋章が胸に刺繍された紺青の騎士服に、馬のしっぽのような赤い髪を揺らして近づく女騎士のレオノーラは、ルクレツィアの横に立つ男を見て、露骨に眉を顰めた。
ルクレツィアはレオノーラを諭すように、淡々と告げる。
「……レオノーラ、アルジェント家のイルデブランド卿よ。車寄せまでご一緒に」
「アルジェント家の……？」
ルクレツィアはレオノーラの直情径行ぶりを知っているので、先に釘を刺した。
「レオノーラ、失礼のないようにね。この方はわたしの――」
「夫だ」
レオノーラが怒り出さないよう上手く言い繕おうとしたルクレツィアの言葉に被せて、イルデブランドが言った。
レオノーラが虚をつかれて押し黙り、そして大きく息を吸って言い放った。
「先ほど、聞きました。まさか本当だったなんて……――グラヴィーナの加護姫であるお嬢様の夫が、よりによってアルジェント家の男だなんて！　女神様のバチが当たります！」

ルクレツィアとイルデブランドの王命結婚の話は、すでに王城中に知れ渡っているのだろう。
ルクレツィアは、怒り狂うレオノーラの灰色の瞳をまっすぐに見た。
「レオノーラ！　これは王命で、ここは王城なの。大きな声を出さないで」
「だって！　いくらなんでも横暴すぎます！」
「レオノーラ！」
王城の廊下で我を忘れて叫びだそうとした護衛騎士を、ルクレツィアが必死に止める。
そして杖を握った手でレオノーラの胸に触れた。
「場所を考えてちょうだい。お願いだから堪えて」
そこまで言われて、レオノーラもはっと我に返る。
「お嬢様……」
「王命が下り、陛下の御前で婚姻証書にサインもしたわ。もう、覆ることはないの。……この方はわたしの夫で、あなたの主人になるのよ。弁えなさい、レオノーラ」
レオノーラは悔しそうに唇を噛み、上目遣いにイルデブランドを睨みつけている。
「申し訳ありません、イルデブランド様。……レオノーラはその……我が家への忠誠心が強く……」
ルクレツィアが詫びれば、イルデブランドは軽く首を振った。
「ああ。突然のことで動揺するのも無理はない。我が家の騎士たちも今ごろ荒れているだろう。お互い様だ」
イルデブランドに支えられて、ルクレツィアはゆっくりと廊下を進む。すれ違う貴族たちの好奇の眼差しをあえて無視し、まっすぐ前を見据えて歩いていると、イルデブランドが言った。
「聞いていると思うが、陛下から奪情命令が出た。俺は一度屋敷に戻り、喪服を脱いでからグラヴィーナ家に向かう」
奪情命令とは、服喪を強制的に切り上げさせる命令である。
ルクレツィアはこくりと頷いた。
「……さきほどダミアーニ卿より伺いました。ダミアーニ卿を見届け人として、今夜婚儀を行うと」
ルクレツィアがわずかに銀色の睫毛を伏せる。
「ああ……」
「こ、今夜？　正気ですか？　今日はロレンツォ様の葬儀だったんですよ!?」
後ろからついてきているレオノーラが驚愕の声を上げるのを無視して、ルクレツィアはため息をついた。
「万事、グレゴリオ叔父様が差配してくださるそうです。――教会への手回しもお任せください」
「ああ……」
しばらく廊下を進んでいくと、遠くに車寄せが見えてきた。
「ひとつ、お伺いしても？」
左側に寄り添うイルデブランドの顔を見上げて、ルクレツィアが尋ねる。
「我が家にとっては、突然の王命でした。……アルジェント家へのご下命はいつだったのです？」

イルデブランドの紫水晶の瞳が、黒髪の隙間からルクレツィアを見た。耳飾りの赤い魔石が揺れる。

「……ロレンツォが失踪して以来、国王陛下は君の結婚を急がせるべく、相手の選定をしていた。俺はオクタヴィアの失踪もあって、しばらくシル……王太子殿下の周囲を離れていた。王太子殿下と国王陛下の間で、どんな話し合いがあったのか詳しくは知らない。うちの者も知らなかっただろう」

イルデブランドは王太子シルヴェストルの乳兄弟で、親友で、王太子の側近を務めている。その彼も異母妹(いもうと)オクタヴィア失踪以来、アルジェント家の私兵や魔術師を指揮して捜索に当たっていた。

「ロレンツォの遺体が発見され、グラヴィーナ家の継承に猶予がなくなった。そこへもってきて、親父が私兵団を聖堂に差し向けたものだから――」

アルジェント公爵は、溺愛していた娘オクタヴィアを殺されたと信じているので、ロレンツォの葬儀を妨害しようとし、中央広場で両家の騎士がにらみ合い、王都は市中騒乱一歩手前だった。

「当たり前だが、国王陛下は親父にも激怒している。おそらく当主の地位を追われるだろう。……言いにくいが、この婚姻は、我がアルジェント家にとっても懲罰的な意味がある」

懲罰的、などと言われ、ルクレツィアはつい、咎めるような口調になる。

「それは……王家が懲罰として、アルジェント家に傷物のわたしを押し付けた、という意味でしょうか」

「傷物……？」

今度はイルデブランドが表情を変えた。

「そんなつもりはなかった。君を傷物などと思ったことはない。そういう意味ではなくて……」

イルデブランドが少しだけ言葉を選ぶように言った。

「言い方が悪かった。俺がグラヴィーナ家の婿に入っても、グラヴィーナ家の内政への関与は禁じられた。この結婚によって、我がアルジェント家がグラヴィーナ家の権益を侵すことはない、そういう意味合いだ」

その言葉に、ルクレツィアは自分が過剰に反応してしまい、少し言い過ぎたと反省する。

「……てっきり王太子殿下が、傷物のわたしをあなたに押し付けたのかと」

ルクレツィアは王太子のシルヴェストルが親友のイルデブランドを婿に押し込み、グラヴィーナ家の実権を掌握しようとしているのかと、疑っていたのだ。

「王命が下った時、あなたがずいぶん落ち着いていらしたので、事前に聞いていたのかと――」

その問いに、イルデブランドの説明はあっさりしたものだった。

「実は、直前に俺だけはシルから聞いていた。登城してまず王太子執務室に顔を出したから。だが、我が家の他の連中にとっては、寝耳に水だったはずだ」

この結婚はアルジェント家にとっても予想外だった、との説明を聞いて、ルクレツィアは余計に納得のいかないものを感じていた。

グラヴィーナ家の継承を確実にするために、王家がルクレツィアの夫を指名するのは、わかる。そして結婚を急がせるのも、理解できなくはない。でもなぜ、よりによって――

「そうなのですね……でもなおさら、王家のお考えがわかりません。よりによってアルジェント家のあなたを、わたしのような傷物の婿になんて。あなたは学院時代から優秀な方でした。もっとふさわしい相手がいらしたでしょうに」

そう言った時、ルクレツィアの左手を支えたイルデブランドの右腕が、わずかに固まった。

思わず見上げれば、彼もまた紫色の瞳でじっとルクレツィアを見下ろしている。

「イルデブランド様……？」

「どんな理由であれ、俺はもうあなたの夫だ。あなたにふさわしくあるように心がけるつもりだ」

まっすぐな目で言われて、その視線にいたたまれず、ルクレツィアは視線を逸らしてしまった。

敵対する家門同士の王命結婚。

本来なら、絶対に結婚するはずのない相手。

そもそもふさわしくない二人なのに――

三人は長い廊下を抜け、王城の車寄せへと出た。

王城に直接馬車で乗り付けることが許されているのは四大公家だけ。したがって、車寄せに並ぶ馬車もみな、四大公家のものばかりだ。

レオノーラがグラヴィーナ家の馬車を呼びに行くのを見送り、ルクレツィアはこれからのことを考えて途方に暮れた。

屋敷に戻ったら、親族や主だった家臣らに説明をして、そして――

突然の婚姻と、初夜。しかも見届け人つきの。

ルクレツィアは眩暈（めまい）を感じて杖を取り落としてしまう。

バランスを崩して大きくふらついたところを、再び背後から抱き留められる。

「ルクレツィア嬢！　大丈夫か！」

ガッシリとした体格と硬い身体に、ルクレツィアはハッと息を呑んだ。心配そうにこちらを見下ろす紫水晶の瞳と目が合う。

杖を落として抱き留められるのは二回目だと気づいて、さすがに申し訳なくなる。

「……イルデブランド様……すみません……」

イルデブランドはルクレツィアの膝裏に腕を回し、軽々と抱き上げた。突然変わった視界に戸惑い、思わず縋りつく。

「あの、下ろして……」

「疲れているんだろう。馬車まで俺が運んだ方が速い」

「ですが……」

たしかに脚は限界がきていた。わずかな距離でも歩くのは厳しいと思い、ルクレツィアは青い瞳を伏せる。

「申し訳ありません。ご迷惑を」

自分の不甲斐なさが情けなくてルクレツィアが詫びるのに、イルデブランドが言った。

「謝ることではないだろう。……君は俺の妻なのだから、夫である俺が支えるのは当然のことだ」

さっきから余計なことばかり考えるルクレツィアをよそに、イルデブランドは彼女を横抱きにし

て、グラヴィーナ家の馬車に近づいていく。
駆者と打ち合わせをしていたレオノーラが二人に気づき、駆け寄ってきた。
「お、お嬢様に気安く触れるな！　アルジェント家の男のくせに！」
レオノーラが食ってかかり、その手が腰の剣に触れるのを見て、ルクレツィアがまずいと思う。
「やめて、レオノーラ！　王城で剣を抜いたら――」
頭に血が上っている女騎士にイルデブランドが冷たく言い放った。
「落ち着け、お転婆騎士。そうだ、この杖はお前が持っておけ」
「な！　――えらっそうに！」
険悪な空気の中、イルデブランドに馬車まで運ばれて、そっと座面に抱き下ろされる。端麗な顔が間近に迫って、ルクレツィアの心臓がドキリと跳ねた。
「俺は着替えてからグラヴィーナ邸に向かう。また、後ほど」
「ええ……後ほど」
すると、レオノーラが背後から彼を押しのけるようにして乗り込み、馬車のドアを乱暴に閉めた。排除された形のイルデブランドが、車窓の向こうで不満そうに顔を歪める。レオノーラが毒づいた。
「フン！　アルジェント家の男のくせに、まったく図々しいったら！」
「レオノーラ！」
ルクレツィアが窘めれば、レオノーラは馬のしっぽのような赤い髪を揺らし、唇を尖らす。
「……だって……あんまりです、こんなの」

レオノーラはルクレツィアの乳母の娘で、足の悪いルクレツィアを守るために女騎士になった。ルクレツィアの生きた杖として、毎日彼女を支え続けてくれている。怪我の事情も知っているからこそ、アルジェント家に対する反感も嫌悪感も人一倍強い。
その事を頼もしく思いながらも、ルクレツィアは首を緩く振った。
「ありがとう。でも、ダメよ。……イルデブランド様はわたしの夫となるの。お願いだから礼は尽くしてちょうだい」
「はい……お嬢様」
ルクレツィアはずっと我慢していた深い深いため息をついて、馬車の背もたれに身体を預ける。ぴしりと鞭が鳴って、ゆっくりと馬車が動き出した。
「……疲れたわ。みんなが、この結婚に納得してくれればいいけれど……」
それは無理な相談だと、ルクレツィアが一番、わかっていた。
ルクレツィアは馬車の座面にもたれ、目を閉じた。
肉体的にも精神的にも疲労は限界に近い。動かない右脚ではなく、それを支える左脚に無理がきている。
緊急招集で四大公家が一斉に登城したせいで、車寄せは混雑して、なかなか馬車が出発しない。動き出したものの、円形の花壇を半周ほどしたと思ったら、すぐに止まってしまった。
「あらら、駆者が喧嘩を始めちゃった。どこのご家中かしら、迷惑ね」
外を覗いたレオノーラが言うのを聞いて、ルクレツィアは目を開けた。いつもとは違う停車位置

から、何気なく窓の外に目を向ける。
ちょうど花壇の向こう側に王城の玄関があり、大きな柱が半円形に並んでいるのが視界に入る。
さっき別れたばかりの黒髪黒衣の男が、回廊の列柱の間を歩いていくのが見え、目で追ってしまう。黒い髪と黒いマントを靡かせ、長い脚をさばいて大股で歩く姿は、学院時代と同じく颯爽としていた。
――あのころよりも、少し逞しくなったのかしら。
学院時代のイルデブランドは、もう少し細身だったように思う。
アルジェント家の御曹司で王太子の親友で、座学の首席を譲らぬ学院きっての秀才。生徒会の副会長で、女子学生の人気も王太子と二分し、常に学院の中心にいた。
一方、右脚が不自由で杖を手放せないルクレツィアは、いつも目立たないように、邪魔にならないように隅っこにいた。だからただ、遠くから眺めるだけの人だった。
――でも時々、ふいにすれ違うことがあって……
図書館で手の届かない棚の本を取ってくれたことや、階段で転びかけた時にたまたま近くにいて助けてくれたことが、一度ならずあった。
今にして思えば、意外と行動範囲が近かったのだろうか？
だが、アルジェント家の人間である彼との接触を、兄のロレンツォは露骨に嫌がった。だから、ルクレツィアから彼に近づいたことなどない。
淡い憧れを抱くまでもないほどの、遠い存在。

絶対に、彼とだけは結婚することはない。そう、思っていたのに――
学院時代の思い出に浸っていたルクレツィアは、彼が足早に向かう先、王城側からは柱の陰の死角となって見えない場所に、ほっそりとした女が立っているのに気づいた。
深緑色のドレスに赤味がかった茶色の長い髪を見て、ルクレツィアの心臓がドクンと跳ねる。
遠目にも豪華なドレスは、かなりの身分の高さを思わせる。
五芒星の間へ緊急招集を受けた、四大公家の令嬢だろうか。
何かの予感があって、心臓の鼓動が激しくなる。
ルクレツィアが息を詰めて見つめる先で、女が腕を伸ばし、黒い喪服のイルデブランドに抱き着く。その光景が目に焼き付いた。
それはほんの一瞬のこと。馬車が再び動き始め、二人は柱の陰の死角に隠れてしまい、見えなくなる。
ずっと呼吸を止めていたルクレツィアが、ほっと息を吐いた。
何気ない、恋人同士の逢瀬。
ただ、それだけ――
ルクレツィアは夢から醒めたような気分で、何事もない風を装い、座面に背中を預ける。
あんな場面をレオノーラが目にしていたら大騒ぎするのでは……と恐る恐るレオノーラを見れば、幸いというべきか、彼女は馭者同士の喧嘩に夢中で、気づかなかったようだ。
そのことにホッと胸を撫で下ろしつつ、思う。

——彼に恋人がいること自体は、不思議ではない。学院時代から、女子学生にとても人気があったし。ただ、そうではなくて……

自分がひどくがっかりしている理由は何かと考え、ルクレツィアは思い至った。

王命が下ったとき、彼は微塵も動揺を見せなかった。

なんのためらいもなく、ルクレツィアとの結婚を受け入れたのだ。

——恋人がいるのに、そんな態度あるかしら？

たとえ王命とはいえ、あっさり了承するなんて、恋人に不誠実だ。

そしてルクレツィアは思い返した。

王太子は、イルデブランドの親友だ。当然、恋人の存在くらいは知っているだろう。にもかかわらず、彼に結婚の王命を下したのだ。

——とんだ茶番だわ。

ルクレツィアは舌打ちしたくなるのをギリギリで堪えた。

王命であれば、イルデブランドはルクレツィアとの結婚を了承せざるを得ない。彼の意志も、恋人の有無も関係なく、彼は頷くしかないのだ。

ルクレツィアは鉛を飲み込んだような重い気持ちで、馬車の揺れに身を任せる。

——彼には、我がグラヴィーナ家の家訓を、きっちりと突き付けておかなくては。

そう心の中で呟き目を閉じれば、脳裏に浮かぶのは、抱き合う二人の一瞬の残像。

屈辱感で胸の内が冷えていき、同時に妙に醒めた頭がひとつの結論にたどり着く。

要するにこの婚姻は、王家とアルジェント家がグラヴィーナ家を支配下に置くためのものだ。

イルデブランドは言っていた。アルジェント家がグラヴィーナ家の家政に干渉することは禁じられている、と。だが、当主の夫となるイルデブランド自身の家政への関与は、ある程度、認めざるを得ないだろう。となれば、彼を通じて、その親友たる王太子と、その母である王妃も——……

ルクレツィアはさきほどの五芒星（ペンタグランマ）の間での、王太子と王妃の様子を思い出した。

王妃はアルジェント公爵の妹で、イルデブランドの叔母に当たる。

ついでに言えば、ロレンツォと一緒に遺体が発見されたオクタヴィアは、王妃が我が子のように可愛がっていた姪だ。当然、ロレンツォとグラヴィーナ家に恨みを抱いているだろう。

その王妃が甥のグラヴィーナ家への婿入りを了承したのは、この結婚によって王家やアルジェント家が一定の利益を得られると思ったからに違いない。

ルクレツィアは手にした杖でポンと左の掌を叩いた。

——十年前の事故の時だって、王家は完全にアルジェント家の味方だったもの。

ルクレツィアは膝の上に置いた杖を見下ろして、事故の記憶に想いを馳せ、喪服の黒いドレスの襟元から、銀の鎖を引っ張り出した。銀の台座に青い魔石と宝石を鏤めた美しいロザリオは、亡き母の形見の品だ。

母はバトローニ公爵家の出だが、ルクレツィアがまだ幼いころ体調を崩し、領地シリンジュでの長い療養の末に亡くなった。母に付き添って領地で暮らしていたルクレツィアとロレンツォの兄妹は、喪が明けて王都に出てきた。それが、十年前のこと。

建国の祖、聖エゼキエーレの聖誕節前の、王太子主催の集まりが、兄妹の社交デビューだった。
王太子と年齢の近い四大公家ゆかりの令息令嬢は、ほぼ全員が参加していた。王太子シルヴェストルだけでなく、イルデブランドやオクタヴィアとも、それが初対面だった。
ちょうど、男女に分かれて談笑していた時、オクタヴィアがルクレツィアのロザリオに目を留めた。
『美しいロザリオだわ。手に取って見せてくださらない？』
母の形見を手渡すことにためらいはあったが、社交に慣れないルクレツィアは拒むことができず、首から外してオクタヴィアの手に載せた。
それが、大きな間違いだった。
『素敵だわ。ねえ、わたくしにくださいな』
『それは、母の形見なのです。お返しください』
『まあ、ずいぶんとケチなのね、この程度のもの』
返そうとしないオクタヴィアに迫れば、彼女は意地になったかのように取り上げようとする。
『うふふ、悔しかったら自分で取ってごらんなさいよ！　ほーら！』
『返して！』
オクタヴィアとしては、軽い意地悪のつもりだったのかもしれない。
ルクレツィアをからかうように取り巻きたちの間で投げて回して……そしてなんと、最後は高く投げ上げてしまった。

その日、王城の広間には聖誕節の聖樹が飾られていた。吹き抜けになった三階の天井に届くほどの枝に、投げ上げられたロザリオが引っかかってしまったのだ。
『あら、見てごらんなさいな、あんなところに！』
『おかしいこと！　傑作だわ！』
呆然とロザリオを見上げるルクレツィアの周囲で、オクタヴィアとその取り巻きが哄笑し、囃し立てた。その姦しい笑い声がまだ、耳に残っている。
それはルクレツィアが、生まれて初めて体験した剥き出しの悪意だった。
アルジェント家とグラヴィーナ家の対立はもちろん聞き知っていた。だが、家同士が対立しているからって、初対面の相手がこんな露骨な嫌がらせを仕掛けてくるなんて、想像もしていなかった。
――どうして、こんなひどいことをするの？
ルクレツィアにとって、亡き母の想い出の詰まった、命より大切なロザリオだった。
それが頭上高く揺れる光景に、ルクレツィアの頭はなんとか取り戻さなくてはと、それだけでいっぱいになってしまった。
大人に助けを求めるべきだったと、今なら思う。でもあの時は、そんなことは考えられなかった。
三階のバルコニーからなら手が届きそうだと、思ってしまった。
オクタヴィアらの嘲笑を無視して、ルクレツィアは広間の螺旋階段を三階まで駆け上がると、無我夢中でバルコニーの手すりから身体を乗り出した。腕を伸ばすと、ギリギリでロザリオが手に届く。だが枝に鎖が絡まっていて、力任せに引っ張っているうちに、揺れる枝に引きずられ、あっと

思った時には宙吊りになってしまった。
騒ぎを聞きつけ、別室で王太子シルヴェストルを囲んでいた男の子たちも駆け付けたが、何ができるというわけでもない。力尽きたルクレツィアは床に叩きつけられ、重傷を負った。
後から聞かされた話だが、ルクレツィアは王太子の婚約者候補に挙がっていた。
その日は、ルクレツィアと王太子の顔合わせを兼ねていたのだそうだ。
王妃は、王太子妃候補として姪のオクタヴィアを推していた。しかし、王家は二代続いてアルジェント家から王妃を迎えるつもりはなく、シルヴェストルの性格的にもオクタヴィアとは合わなかった。王家の意向としては、王太子の婚約者にはルクレツィアを迎えるつもりでいたのだと。
オクタヴィアが、王太子妃候補のライバルであるルクレツィアを牽制した結果、予想外に大きな事故になってしまったのだ。
証言もあり、事故の原因はオクタヴィアの悪戯（いたずら）だとはっきりしているが、結局、王家はことを大げさにすることを望まず、オクタヴィアはもちろん、アルジェント家からも正式な謝罪はない。王妃に至っては、手すりから身を乗り出して落ちたルクレツィアが悪いとまで言い、ひたすらにオクタヴィアを庇っていた。オクタヴィア自身もそんな風に自分を正当化していた節がある。
ルクレツィアは右脚に大けがを負い、王太子妃候補を降りた。そして王太子シルヴェストルは、この事件を理由に、オクタヴィアを王太子妃候補から完全に外した。
当たり前だが、父ルシアーノも兄ロレンツォも、オクタヴィアやアルジェント家に激怒していた。よりにもよってそのオクタヴィアと、兄ロレンツォが心中までする恋仲だったとは、到底、思えないのだ。
ルクレツィアは騒動の種になったロザリオをもう一度眺めてから、それをドレスの下にしまった。
馬車は夕暮れの王都の街を走り抜け、郊外にあるグラヴィーナ邸へと向かう。暮れなずむ空が夕焼けから夜の色を帯び始める。宵の明星が天に輝いていた。
ルクレツィアは目を閉じ、もう一度、大きく息を吸った。
――今日は、長い一日になるわ。

◆◆◆

グラヴィーナ邸は、王都の東北の隅に広がる森に囲まれるようにある。
もともとグラヴィーナ家は王家に忠誠は示しつつも女神への信仰を守り、領地シリンジュとその地にある魔石鉱山の経営に専念してきた。必要がなければ登城しないので、高位貴族の屋敷の中では王城からもっとも遠い。
ルクレツィアの馬車が到着した時には、あたりはすっかり夜になっていた。
鉄製の大門を通り過ぎ、魔導ランタンの灯を頼りに並木道から正面玄関の車寄せに向かう。
鬱蒼とした森からはフクロウの声がし、青い月が出ていた。
広壮な屋敷にはすべての窓に明かりが灯されていたが、どこか鬱屈した雰囲気が漂っている。
当主ロレンツォの失踪からその遺体の発見、そして葬儀の際に発生した騒ぎにより、邸内の空気

はずっと重苦しかった。さらにそこへ、ルクレツィアへ王命結婚の勅書が下ったのだ。
怒涛のような一連の出来事は、すでに伝令によって家令と家政婦長に伝えられているだろう。
車寄せで出迎えたのは、正装に身を包んだ家令のジョバンニだった。自ら馬車の扉を開き、白髪のめっきり増えた頭を恭しく下げる。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
「ただいま、ジョバンニ。……聞いているとは思うけど、今夜は忙しくなるわ」
「は」
先に護衛のレオノーラがひらりと飛び降り、馬車の下からステップを引き出す。
ジョバンニが差し出す手を取り、ルクレツィアが慎重にステップを降りるのを、レオノーラが反対側から支える。
「親族や譜代の家臣たちはどうしている？」
「はい、伝令の騎士たちから事情を聴いて、不満を零す者もおりましたが、先にお戻りになったグレゴリオ様が鎮めてくださいました」
「そう……わたしの結婚のことも……？」
二人に支えられながら屋敷内に足を踏み入れ、ルクレツィアが尋ねれば、ジョバンニが声を落として告げた。
「後の差配はグレゴリオ様とミケーレ様がなさると……」
「ミケーレ兄様が？」

ルクレツィアの声が少しだけ弾んだ。
五歳年長のミケーレは、代々、グラヴィーナ家の領地シリンジュの代官を務める家の跡継ぎだ。主家への忠誠心がことさらに強く、ルクレツィアにとっては第二の兄のような存在である。
――ミケーレ兄様には、後でお礼を言わなければ。
優しい幼馴染の顔を想い浮かべつつ玄関ホールに入ったところで、首元まで詰まった灰色のドレス姿の家政婦長テルマが、侍女やメイドたちを従えて出迎えた。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
「ありがとう。……この後、イルデブランド様と国王の勅使、リカルド・ダミアーニ卿がいらっしゃるわ。大広間で祝宴と……寝室の用意をお願い」
「……はい。すでにご用意させていただきました」
テルマが一瞬のためらいの後に頭を下げる。
もともと、ロレンツォの葬儀のために、親族や主だった家臣は王都に集まっていた。
突然の婚礼であるが、ささやかながらも祝宴を張らなければならない。
「ワインのランクを上げ、樽の数を倍にし、料理にも急遽、鱒と鴨肉を追加いたしました」
「ありがとう。世話をかけるわ」
万事手配済みと聞いて安堵する。突然、家を率いることになったルクレツィアにとって、頼れる使用人は命綱のようなものだ。ルクレツィアはテルマの隣に控えていた一人の侍女に目を向けた。
淡い茶色の髪をまとめて黒いリボンを結び、飾りの少ないドレスをまとっている。

彼女――ゾエはメイドではなく、下級貴族出身の侍女だ。そして兄の秘密の恋人だった。いつもひたむきに兄ロレンツォを見つめていた灰色の瞳は伏せられ、顔色は青白く、表情も硬い。

――当然だわ。恋人が死んだだけでも辛いのに、他の女の遺体と発見されるなんて。

ルクレツィアは、気遣うように彼女に声をかけた。

「ゾエ……」

ゾエと呼ばれた侍女がハッと顔を上げ、軽く腰を落とす。

「……着替えを、手伝ってくれる？　話したいこともあるの」

「はい、お嬢様」

ルクレツィアはゾエと護衛の女騎士レオノーラに支えられて、階段を上って自室に向かった。

「お湯は……」

「後にするわ。大急ぎで着替えて広間に向かわないと。――喪服を脱ぐようにと、陛下がご命令を下したわ」

「承知いたしました」

自室に入ると、ゾエが素早く黒ビロードのドレスを脱がせると、黒絹のアンダードレス姿になったルクレツィアに尋ねた。

「どちらのドレスになさいますか？」

ルクレツィアは少し考えて、紫色のドレスを選んだ。銀糸刺繍が入って華やかだが、色味は落ち着いている。

――これなら、花嫁としても礼を失しないでしょう。イルデブランド様の瞳の色だし。

襟ぐりの大きく開いた黒いアンダードレスの上に濃紫色のドレスを着て、胸の下に真珠の装飾付きの飾り帯を結ぶ。銀色の髪は上半分だけ結って真珠の髪飾りをつけた。

鏡に映るのは、青い瞳が不安げに揺れる女の顔だ。

胸に垂れる母の形見のロザリオに手で触れて、ルクレツィアはため息をついた。

十年前の、あの事故の発端になったロザリオ。

事故の元凶でもあるオクタヴィアの兄――イルデブランドは、責任を感じたのかシリンジュ領まで謝罪に来たことがある。

――あの家で、まともに詫びてくれたのは、彼だけだわ。

学院入学後も、杖を手放せないルクレツィアを心配してくれていた。王命による政略結婚ではあるが、アルジェント家の中ではいくらかマシな相手だと思わなければ。

ゾエが化粧を施し、唇に紅を差す。鏡に向かったまま、ルクレツィアは言った。

「アルジェント家側は、お兄様がオクタヴィア様に懸想していたと本気で信じていたようよ」

ハッと手を止め、ゾエが鏡越しに見つめてくる。

「名前は告げていないけれど、あなたの存在は話しておいたから。いずれ、アルジェント家から、問い合わせがあるかもしれないわ。一人で答えずに、わたしの立ち会いを求めなさい」

「はい。お嬢様」

ゾエの、灰色の瞳が不安げに揺らいだ。

「お兄様の名誉は必ず回復するわ」
「はい。お嬢様……」
ゾエが畏まって頭を下げた。
そこでふと階下が騒がしくなった。どうやらアルジェント家の馬車が到着したらしい。
賓客の出迎えは叔父のグレゴリオが引き受けてくれるはず。
ルクレツィアは準備を終え、護衛騎士レオノーラの介添えで自室を出て広間に向かおうとした。
「あの、お嬢様……」
背後のゾエから控えめに声をかけられ、ルクレツィアは振り返った。
「あの――差し出がましいかとは思いましたが、その――結婚式には花嫁はヴェールを被るのがしきたりです。……よろしければ、これを――」
ゾエの手には、細い糸で編まれた繊細な白いレースがあった。
「これは……」
「その……これはわたしの亡き母が嫁いだ時に使ったものだそうで……お嬢様のような高貴なご身分の方にふさわしい品とは言えないのですが」
「そんなことはないけれど、あなたにとって大切なものでしょう？」
ゾエが泣き笑いのような顔をした。
「これを被って嫁ぐのが夢でしたが、その相手がいなくなってしまいましたので……」
ゾエが愛した兄ロレンツォは死んだ。遠い地方の森の中で。――別の女と死体で発見された。

ルクレツィアはしばらく無言でゾエを見つめてから、頷いた。
「そう……なら、せっかくだから使わせていただくわ。被せてくれる？」
「はい、お嬢様……」
ゾエがルクレツィアの顔を覆うようにレースのヴェールを被せる。
鏡に映る姿は、それだけでぐっと花嫁らしくなった。
「わたしの故郷では、誰かから受け継いだ花嫁のヴェールが、幸せをもたらすと言われています」
ルクレツィアがヴェールの下からゾエを見た。
「これがどんな結婚であっても、お嬢様が幸せになれるよう、祈ります」
「……ありがとう、ゾエ」

◆◆◆

ヴェールで視界が制限されたため、ルクレツィアは普段よりもいっそう注意深く歩みを進めた。
玄関ホールに続く大階段を、レオノーラに支えられながら一歩一歩、慎重に下りていく。
ちょうど下り切ったところで、ポーチから入ってきた賓客と鉢合わせした。
黒髪のすらりと背の高いのがイルデブランドで、それより少しだけ背の低いのが、彼の異母弟アモディオだと気づく。
どちらも黒いマントを左肩にまとっている。マントの下はそれぞれ濃紺とグレイの正装姿だった。

そしてもう一人は、白髪を綺麗に撫でつけた壮年の男性。口髭も整えられて、刺繍の入った豪華なコートをまとっている。先ほど話しかけられた勅使で見届け人の国王秘書官、ダミアーニ卿だ。

「これはこれは、花嫁のご登場だ！　花の顔(かんばせ)がヴェールで隠れているのは残念だが、いやたしかに。そうあるべきですな！」

場を盛り上げるためかことさら陽気に話しかけてくるダミアーニ卿に、ルクレツィアは礼儀正しく頭を下げる。

「……ようこそ、グラヴィーナ家に。ダミアーニ卿、本日はよろしくお願いいたします」

そしてアルジェント家の兄弟に向けても、軽く会釈した。

「アルジェント家の方のご来訪は、百年ぶりになりますかしら。アモディオ様もお久しぶりです」

アモディオも学院時代、ルクレツィアとは同級生だった。

――ただし、ほとんど口をきいたこともなかった。

ルクレツィアの挨拶にアモディオが応える。

「ルクレツィア嬢、学院卒業以来だね。君が義姉になるなんて、光栄だよ」

どう応えていいかわからず、ルクレツィアがヴェールの下で困惑していると、叔父のグレゴリオ枢機卿が彼らに促した。

「我が一族はすでに礼拝堂に揃っております。教会より急遽、司祭も派遣してもらいました。……私は親族なので、司式は他の司祭に譲ります。まずは、女神に誓いを」

グレゴリオの先導で、一同は屋敷内の礼拝堂に移動する。

立ち読みサンプル
はここまで

高位貴族でも邸宅内部に女神の礼拝堂を備える家は多くはない。あっても、屋敷の片隅に設ける程度だ。

だが、グラヴィーナ家は王国で唯一、女神の加護を受けた家である。

ゆえに代々、女神への信仰が特に篤く、礼拝堂も邸宅の中心に、中庭に突き出すように造られている。

中庭をめぐる回廊には魔力灯がいくつも灯っていた。その光に導かれるように歩いていくと、白亜の礼拝堂に突き当たる。ドーム屋根が魔力灯の明かりに照らし出されて白く輝いている。

ダミアーニ卿が感嘆の声を上げた。

「……これがグラヴィーナ家の聖堂ですか……噂はかねがね伺っておりましたが、これほどとは」

グレゴリオが列柱の間に並ぶ巨匠による神の像を指して、いちいち説明を加えれば、ダミアーニ卿とアモディオが感心したように聞き入っている。

開いた入口から覗けば、正面奥には薔薇窓とステンドグラスが飾られ、白大理石の女神の像があった。魔力灯が照らす聖堂の内部は明るく、祭壇には銀の燭台が並んで蝋燭の明かりが揺らめいていた。入口から祭壇前までは赤い絨毯が敷かれ、左右に木のベンチが並び、席は半ばが埋まっていた。客はグラヴィーナ家の親族と、主だった家臣たちだ。

「ペドロ司祭、新郎新婦が到着した。略式で構わないので、誓いの司式をお願いする」

グレゴリオが呼びかけると、白い服を着たまだ若い司祭が手を挙げた。

「では、中央の道は新郎新婦のみで、他の方々は壁際を移動してください」